

戦後史再考

「歴史の裂け目」をとらえる

発行日——2014年10月24日 初版第1刷

編著者——西川長夫・大野光明・番匠健一

発行者——酒田裕一

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区神田神保町3-29 千101-0051

電話 (03) 3230-6580 [編集]

(03) 3230-6572 [営業]

振替 00180-0-29639

装幀者——岡本洋平

印刷・製本——図書印刷株式会社

©NISHIKAWA Nagao, KATO Chikako, SUGIURA Kiyofumi,  
NISHIKAWA Yuko, SHIM Hee-Chan, HARA Yasuke, MATO  
Yoshitada, IWAMA Yuki, BANSHO Ken-ichi, OHNO Mitsunaki,  
PARK Jongseok, KURAMOTO Tomoaki, SAI Hiroonori, CHOI  
Seungkoo 2014 Printed in Japan  
ISBN978-4-582-45447-5

NDC分類番号210.76

四六判(18.3cm) 総ページ228

平凡社ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

著丁・乱丁本のお取り寄せは小社担当者サービス係までご連絡ください  
(送料は小社で負担いたします)。

現在、植民地や占領地において国語や日本語教育が果たした役割といったものが研究者によって批判的に検証されていますが、もし仮に戦前の帝国日本の国民を育成した国語教育が何の審判も経ることなく戦後へと持ちこざれているのだとすれば、それは他者の過去に対して誠実でないだけでなく、そうした国語の世界の中で何らかの形で自己表現している現在の私たも自身がどうしようもなく「国家」の枠組みの中に絡めとられてしまっていることを意味しています。言葉を換えれば

## 2 個人の「煩悶」を抑圧してきた国語教育

7シアの第二共通言語として確固たる地位を築いていました。しかし、戦後におけるこうした国語や日本語教育の輝かしい復活を、もし仮にそれを戦後に再び受容せざるをえなかった旧植民地の側から眺めた場合、おそらくそこには日本国内とは違った国語/日本語の「戦後」の形が見えてくるはずですが、戦後日本ではすっかりその存在が忘却されてしまった植民地に再び舞い戻っていった日本語はいったいなぜ、そしてまたどのようにしてアジアの第二共通言語としての地位を築いていったのでしょうか。こうした日本語普及の過程において、実際の日本語教育の現場ではどのような矛盾や軋轢が起こっているのでしょうか。本章では日本の戦後史といった一国的な視点をすらすらためにも、主に国語教育と日本語教育の持つ連続性を簡単に述べた上で、戦後台湾における日本語教育の歩みをたどることによって、両者が持つ共通点と現在の日本語教育が抱える問題を盛りだくさんに考えてみたいと思います。

戦後、日本で戦前帝国臣民を形作っていた国語教育は、東京裁判において日本の植民地主義や軍国主義を煽った「戦犯」として処刑されることなく、むしろ戦後新たに誕生した民主国家に相応しい国民の育成を担うものとして期待されました。当用漢字や現代仮名遣いの制定など、国語民主化の掛け声の下で断行された一連の改革を通じて戦後再出発を果たすこととなった国語教育は、植民地や広大な占領地を失い、列島規模の新生日本を再統合する上で大きな役割を果たしてきました。一方、満洲事変から太平洋戦争にかけて、広大な占領地の異民族を包括的に統治・支配するために生まれてきた日本語教育は、戦後は高度経済成長の波に乗って、かつての「東亜共通語」としての地位を復権するよう旧植民地や東南アジア占領諸国を中心に普及され、つい最近まで英語に次ぐ

## 1 はじめに

### 第二章 「煩悶」の日本語教育

戦後台湾における日本語教育を視座として

倉本知明